住井すゑとその文学の里（五十三）

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員
栗原（くりはら） 功（いさお）

『夜あけ朝あけ』―住井の書き下ろし小説―

第8回毎日出版文化賞を受賞

住井が書き下ろした小説『夜あけ朝あけ』は昭和29年（1954年）6月に新潮社から刊行され、この年の第8回毎日出版文化賞を受賞することになった。11月1日の毎日新聞には、住井すゑが、ほかの受賞者と一緒に写真入りで紹介された。そして、4日には授賞式の模様が報道され、「時の人」の欄にはインタビュー記事まで掲載され、住井は一躍有名人になってしまった。住井の二女（増田）れい子は、その前年、東京大学を卒業して、毎日新聞社に女性記者第1号として入社しており、「時の人」の記事は、デスクの命令で彼女が書いた。『生活は文学をするためにある』という母のコメントを娘が記事にした。

⬆新潮社刊『夜あけ朝あけ』
―犬田家提供―

劇団民藝で映画化

『夜あけ朝あけ（※1）』は、敗戦間もない農村で取材した少年小説という評価を得、劇団民藝で映画化され、昭和31年（1956年）9月に『あやに愛（かな）しき（宇野重吉監督）』との2本立てで、都内の松竹座、文芸座、グランド・オデオンと横浜のレアルトで封切られた。

劇団民藝は滝沢修、宇野重吉、北林谷栄（※2）らが昭和25年（1950年）に創立。以来「心に明るい火を点ずるような、生きてゆくよろこびともなり勇気づけともなるような」演劇芸術をつくりだそうと公演活動を続けてきて、今年創立60周年を迎えている。

⬆映画『夜あけ朝あけ』の主人公兄妹。―月刊民藝の仲間（1955年10月1日号）より転載―
右から武（屋代将之）、えつ子（遠井慶子）、みどり（小川英子）、正司（吉田隆）

映画『夜あけ朝あけ』は昭和30年（1955年）4月に結城市内（旧絹川村）でクランクインして以来、7回の現地ロケーションで約4分の3の撮影が終わり、翌31年2月に全製作が完了している。

第1回のロケーションでは、結城市内の旅館に泊まって仕事をしたが、第2回目からは宿泊などの経費をできるだけ切り詰めて製作費に入れようと、布団を作り、農家や役場に分泊して撮影を続けた。『月刊民藝の仲間』（1956年1月1日号）によれば、朝は5時に起床し、夜は11時までという仕事が一週間も続き、それでも寸時の休憩もなく働くスタッフに、土地の人たちも「映画の人のよく働くのには驚いた」と正直に感心していた。

一方、スタッフと主たる配役は次のようだ。

【スタッフ】

〈製作〉大塚和、松丸青史
〈原作〉住井すゑ
〈脚色〉片岡薫
〈監督〉若杉光夫
〈撮影〉前田実
〈音楽〉斎藤一郎
〈配役〉奥山えつ子役…遠井慶子、奥山正司役…吉田隆、奥山マサ役…乙羽信子、奥山ウネ役…北林谷栄、日高三平役…宇野重吉、日高すえ役…小夜福子、日高たね役…三崎千恵子、日高万作役…山内明、新聞記者役…大森義夫、中学校の先生役…内藤武敏、小学校の先生役…奈良岡朋子、傘修繕屋役…佐野浅夫、おかみさん役…細川ちか子

※1　昭和47年（1972年）の1月25日と2月1日にNHKラジオ第2の『名作をたずねて（中学校国語）』で『夜あけ朝あけ』が放送されている。

※2　滝沢と宇野は戦前に新劇界に入っているが、当時は苦難の活動であった。

■本紙掲載に際して劇団民藝より、取材協力と貴重な諸資料の提供をいただいた。

➡『巨匠』。劇団民藝60周年記念＝平成22年（2010年）1・2月の東京六本木の俳優座劇場での上映シーン。ドイツのヒトラー総統率いるナチスによる占領下のポーランド国内。左からゲシュタポ（秘密国家警察官）役の鈴木智、通訳役の安田正利、老人役の大滝秀治―撮影谷古宇正彦。※木下順二作、内山鶉演出。ジスワフ・スコウロンスキ作『巨匠』に拠（よ）る。劇団民藝提供。